

32 ベルツ博士の精神とヘルテル (大阪医科大学) 教授

山上勝久

山上医院

明治時代、お雇い外国人医師のうち、エルウィン・フォン・ベルツ博士は二十九年にわたり日本に滞在し、多くの人の診療にあたり、優秀な医師を多く育てた。ベルツは、医学に貢献したばかりでなく日本文化全般にわたり良き理解者であったと同時にすごい批判者でもあった。ベルツは東京大学医学部を中心に活躍したが、大阪にもベルツの精神を受け継ぐ医師がいたことはあまり知られていない。その医師とは一九二二年(大正十一年)、大阪医科大学(当時大阪府立、後大阪大学医学部)に迎えられたフリッツ・ヘルテル教授である。ヘルテルはベルツのことに非常な関心を示し、ベルツが日本へドイツ医学を導入し日本医学の発展に多大な貢献をしたことを讃えた。

ヘルテルは、一八七七年(明治十年)ドイツ・ザクセン地方に生まれた。ハイデルベルヒ、ベルリン、ウイン、ハレー、ミュンヘン各大学で法律、医学を修めミュンヘン大学にてドクトル学位を授与された。ハンブルグ大学では、熱帯学研究、一般医学研究に従事した。その後、ボン大学、ベルリン大学にて外科学研究に従事し、ビール教授、シュミードル教授に師事した。ハレー大学では泌尿器外科の大家、フェルケル教授の下、外科のオーベルアルツとして活躍した。一九一七年(大正六年)、プロインセン政府よりプロフェソルの称号を授与された。

一九二二年(大正十一年)佐多愛彦、大阪医科大学学長招聘により来日し、外科学第一講座主任となり教室を創設した。以後八年間に渡り日本で診療、教育、研究に活躍した。ヘルテルの業績のうち最も著名なものは、三叉神経痛に対するガツセル氏神経節内アルコール注射療法を創案し広めたことである。局所麻酔、全身麻酔、創傷治療、包帯法など外科全般に渡り数々の業績をあげた。整形外科的な業績も多く理学療法に

も熱心にとりくんだ。当時日本で多く見られた脚気やハンセン氏病にも研究を進め診療にあたった。

ヘルテルは、第二のベルツになることを欲していたと言われる。ベルツ同様日本をこよなく愛し、日本文化、日本芸術をよく研究し高い評価を与えた。日本文化になじむことに力を傾け、できるだけ詳細に日本の風俗習慣を研究し臨床に応用した。日本古来の風習や当時の習慣の中で利用しうるものを見つけ出しこれらを外科の治療法に取り入れた。日本の温泉療法についても注目し各地の温泉の状況を欧米に紹介した。

午前は大学での診療、午後には個人診療所での診療に従事した。ここでは日本人はもちろんであるが諸外国人の診療にあたった。診療においては決してスペチアリストになり過ぎてはいけない、全人的な観点から患者を診る必要性を強調した。この考え方はベルツの精神に通じるところがある。

時には和服を着て畳の上に座った経験から日本の衣服を論じている。日本演劇なかでも歌舞伎、人形浄瑠璃などの鑑賞のためにも努めて多くの機会を持ち一通

りの知識を得ていた。また相撲にも強い興味を示した。在日中、ヘルテルは日本各地を訪問、各地の風土を身に触れて日本に対して見聞を広めた。そしてあらゆる角度からの日本や日本人、日本の医学などに関し、滞在中はもちろん帰国後にも欧米へ紹介する努力を怠らなかつた。日本語の勉強にも熱心に取り組み、真に親作家といえ第二のベルツと言って差し支えない。

一九三一年（昭和五年）帰国後、オスカーチーテン市民病院外科医長となった。昭和十五年、六十三歳で病没した。

ヘルテル外科は、小沢凱夫教授が後任教授となり実質的な外科学第一講座開設者となった。ヘルテルの門下生の一人、山上甚三郎は、昭和十四年七月、「碩学ベルツ博士」を発刊した。